C1 序説

さて、本書が企てているところというのは、即ち、訥弁（吃音）についてのなんらかの構造的原理を引き出す試みである。永い間、この症状は知られていながら（古代ギリシアの哲学者ソクラテスも訥弁だったといわれる、風説の類かもしれないが）その明晰な説明は与えられなかった。著者も訥弁なので、この問題に対する材料は、自己観察によって潤沢に与えられうる。もっとも、本書は哲学・思想にカテゴライズされるものとして提出しなければならない。なぜならば、客体的というよりも比較的感覚的な確信によって割り切ったところも多くはないが存在するからである。この精神的な問題ではこの直感や狂気が、自分が症例の当事者になっているときに限って、特に正確な情報を差し出す。むしろ論理的な合理的帰結よりも正確な場合が存在するのである。

まあ読者諸君には、私のいうところを好好爺の戯言として捉えていただきたい。本書の最大の滑稽はそこにあって、難解には作られているが、無際限にかみくだいて説明でき、ひいては、しかるにほとんど無内容な結論しか、必然的に帰結しえないということなのである。ただし、のちに語られるであろう「なぜ累次はアンヴィテルなのか」というおそらく分野的に広汎かつそれなりに重大な世紀の問題を提出したことはかろうじて評価されうるかもしれない。

ところで無内容にもかかわらず、人間の精神構造という哲学的に深層な問いにまでボーリングしえたということも、ここで私は白状しておく。おそらくこれは、どれほど精神的病理の末端に位置するような症状であろうと、すべて共通の土壌から萌芽する兄弟姉妹なのであって、いかなる迂路を辿っても究極的には人間の精神構造についての論述を迫らせるための明晰な枠線がそこにあるからであろう。それゆえ、まずもって私の論述の、特に臨床的セクションでの、もっとも基礎的な精神構造論を露呈しないわけにはいくまい。

さしあたって、読者諸君には批判的構えによって本書を読み解かれること、あるいは本書を少しでも頭の体操の足しにならしむること、これらを心から希望する次第である。

C2 原理的背景としての訥弁論の構築

ここで目的とされることは、まずもって訥弁（吃音）の三様のパターンをいくつかのある一定の基準をもって位置づけること、そして訥弁の伴侶としての様々な具象的現象を原理的に説明することである。

S1 累次

ある行為ないしはある思考によってその全体像が形成されるパロールあるいはエクリチュールの連続体を累次という。この概念のもっとも切実な例は、文章や発表などの言語活動である。これら（パロール的累次あるいはエクリチュール的累次）は普通、その諸部分が互いに結合しており、ひとつの連続体を形成している。また、この連続体は、ある行為ないしはある思考がある一定の方向へと流されながら、またそれらによって、順次的にその諸部分が累積されるようなものである。訥弁とはこの流動のなんらかの異常であるということは自明の理として、異論の余地なく、まずもっていえる前提である。

累次の向き（累積の積載してゆくほうの向き）について、これは行為や思考のある一定の方向と完全に背くような向き、つまりそれらの方向と逆の方向である。

S2 患縁体

累次の内部に存在しめられうるその暫定的かつ局所的な崩壊が生ずるような場所、あるいはそのような流動的特異点のことを患縁体（これは私の造語である）という。また患縁体が存在できない累次のことをアトム累次といい、これを累次の基礎的な単位として用いる。そして、患縁体は諸アトム累次やアトム累次と空虚との間隙にしか位置づけられない。

S3 訥弁の概念的定義

訥弁とは、累次に対する患縁体の構築である。

S4 精神構造論超概論断片

人間の精神構造は、理性と狂気（感覚的）の二項図式によって成立している。一方の精神状態からの遷移には、非物理学的な仮想的エナジーの反省が伴う。理性から狂気への遷移はエルアンヴィテルによって、狂気から理性への遷移はアンヴィテルによって行われうる。そしてこれらのエナジーはそれぞれ互いを補填することができ、数学的な例を用いていえば、相同数量のエルアンヴィテルとアンヴィテルの総和は零である。

S5 反芻時差

累次の胎児段階（メタファー表現である）について論じるために、累次の複合的な意味を解脱し、ひとえに形成図（文章的）という側面の意味をもって、累次という言葉を使用することを明言する。さて、累次の胎児段階では空虚と語頭のアトム累次との間隙に患縁体がすでに存在しているように思われる（この患縁体のことを胎性患縁体という）。この胎性患縁体を跳梁（超越）することは、累次の向きについての概念だけを用いても、当然不可能である。このようなパターンでは、狂気のみが患縁体を跳梁することができる。即ち胎性患縁体はエルアンヴィテルによって跳梁されるが、訥弁においてエルアンヴィテルはアンヴィテルに賄われなければならない。ここでひとつの例を想像してみよう、ある青年がギャンブルに入り浸り、自己のあらゆる善を放棄し、その放縦の果てに自己の財産のすべてを賭けてディーラーや他のプレイヤーとテキサスホールデムをやるスリリングな体験を。このような賭けが、つまるところは胎児段階におけるエルアンヴィテルの様相をありありと写実していることに気づかなければならない。このような狂気（表現でなく）の賭博を狂賭といい、また累次によって狂気（アンヴィテル）を賄うことを賄吟という（なぜ賄吟が必要なのかは読んでゆくうちに自ずと明らかになるであろう）。このような現象が、前借り的な逆説を込めて、反芻「時差」と呼ばれる。

S6 フィラー繋合

例えばフィラー（間投詞）のような遷延物はそれ自体ある程度の幅を持ち、アトム累次として君臨する。フィラーの老人段階の末端にはテーゼの累次の胎性患縁体が繋合し、それが累次の向きの概念によって原理的には跳梁されるが、フィラーの胎性患縁体はそのまま残留する。フィラーの胎性患縁体は狂賭の自信に足る、なぜならばアトム累次の特質は患縁体の介入が不可能であるということであるから、賄吟が保障されているからである。伸発性の症状もほとんど同様の理論性を持つ。

S7 賄吟されぬとどうなるか

実際の症例に答えを要求しよう。連発性の症状は、胎性患縁体の狂賭に対して、なんらの賄吟もされていないことを意味しているのである。つまり、賄吟されぬと反復する。このときの帰着（前反復）がアンヴィテルの領域であって、「正気への回帰」を意味する（これをアンヴィテ

ル回帰という）。

S8 症例の系列

狂賭性と賄吟性のそれぞれを決定することにより、症例の系列の中の何処かの位置に帰着するようにする。以下、C1における一応の問題を克服した結果である。

「難発性」 ⇒ 狂賭：無 ∧ 賄吟：無

「連発性」 ⇒ 狂賭：有 ∧ 賄吟：無

「伸発性」 ⇒ 狂賭：有 ∧ 賄吟：有

C3 臨床学的な訥弁論

ここで目的とされることは、原理的訥弁論の臨床学的方向への加速とそのための細分化である。

S1 精神構造論超概論承前

まず、理性とは恣意性の解放である。それと対比されて、狂気とは恣意性の抑圧である。

S2 患縁体の主体との繋合性

患縁体が構築されるものであること、つまり理性と内的関係にあるということを証明する。そのため、C3-S1で述べられた仮定を用
いるが、恣意性は患縁体の血のつながった親ではない、すなわち、否定的な間接性をもってしか、この仮定は効力を発揮しない。それゆえにこの症状の治癒の一方法として、理性と狂気の統合、つまり恣意性の破壊という恐るべき方途を提案することはない。

さて、症例を参照するとすればこの場合何に注目すればよいだろうかといえば、例えば訥弁者の各々では、ある特定の音が言い難かったり、ある特定の単語でよくつまったり、ということがしばしばある。これは患縁体と精神（理性と狂気の双方を含んだ全体）が内的関係にあるということを意味している。たとい、患縁体が外的対象であって、精神の内的作用がそのいずれかを採用し、しかるべき場所に構築する、という構造であったとしても、差が存在しない。また、C3-S1での述懐を引用して、精神の内部構造のうちのいずれがその機能を担うかといえば、それは理性の他にあるまい。つまり、狂気とは外的関係にあり、これが跳梁性をもつか、排斥性をもつか、という問いには意味がない。完全なる他者と、つまり主体と切り離された他者と、いかなる面で接触することがあろうか、むしろ接触しないことが定義づけられた宿命なのではなかったか。

S3 自己脅威

臨床学的に優越な概念を作りたい、なにかこう、これが克服されたらそれこそが治癒だ、というような。そういうものを自己脅威というこ
とにしよう。

アンヴィテル回帰、賄吟、狂賭の無といい、これらはある一言で片づけられる。つまるところ、「理性（正気）の渇望」として。このあらゆる症状の背景には「正気への回帰を渇望するところの衝動」がのさばっているからである。そして、ある事実をこれと衝突させてみるため、

ある例を想像してみよう、「企てられた訥弁」について。意図的に訥弁を発することについて、何らかの否定的衝動、というかむしろ浄化的な虚空を感じる。これとは反対に、逆説的だが、訥弁禁止令のようなものが標榜されたからこそ、人間は訥弁を発するものである。このことが意味していることは、自己脅威に恣意性が通暁していないことであり、自己脅威は狂気にあるということである。即ち、自己脅威はアンヴィテルへの渇望なのである。これは、例えるなら信仰の自由（人為の人間の普遍的権利としての、つまり法で規定された自由権についてではなく）という問題と緊密である。畢竟、キリスト教徒の信仰、神々が天空で我々を一望のもとに見渡しているとか、聖書の著者は神だとか、そのような科学的な冷徹さをもった人間には到底信じがたいような内容を日々信じようと努め（信仰心を強くし）、信仰心の揺らぎの因果としての自己の罪を懺悔し・・・という、信じることの難しさ、何を信じるか選択できないという厄介な不可能性の問題と緊密である。これが私の持つ、自己脅威が狂気にあるという事実から感じる世界である。

S4 重大な誤り？

ところで、なぜそこまで理性を渇望するのだろうか。訥弁を発する場面で代表的な場面、あるいは訥弁そのものから感じる心的形成物、こ
れらの材料を集めよう。たとえば、美しい女の子とお話しするとき（つまり、うまくやって仲良くなりたいとき）、弓で射貫くときのようにびくびく緊張しているとき、自己の考えを言葉で表現するとき・・・・、と様々あると思われるが、結局これらを一貫するのは、不完全性への危惧というところである。なぜ理性なのか、というのは不完全性が理性という意識的な注意力によって克服できると「信じて」いるからだ。さあ、たとえば不完全性を言い違いや聞き違いなどといった錯誤行為に代表させて考えてみよう。ときに、オーストリアの精神医学者 Sigmund=Freud（1856-1929）は自分の著作である「精神分析入門」で、「錯誤行為というものは注意力の向いているときにこそ、むしろ多く発揮されるものである」というようなことを述べている。たとえばこれを真実だとすれば、いやはや、もしも不完全性への危惧という事実が具象的な現象例から塑性的に導かれようとしていたのでなくて、たとえば私の理論をさらに拡大させたものから、あるいはもっと規模の大きいほかの理論から“演繹的”に導かれようとしていたのなら、錯誤行為の逆説性と精神の錯乱とが混入して、大変に我々は路頭に迷ったであろうと、おそらくいうだろう。まあ「信じる」というのは主観性のものなのであって不確実性がつきまとうのは至当なのであるが。しかし、このような否定的な結論においては、もはや好みの問題となってくるので、我々が探求すべき対象はさらに限られてくる。その対象というのは、理性の渇望を信仰していながら訥弁を発することのない人間である。そのような人間が存在するとしての話だが。

S5 完全性の承認

そういう人間を私はいままで確認したことがない（そういう人間もあるいは存在しているのを私は見たことがあるのかもしれないが、見分
けられるとは到底思えない）。ゆえに、結局は理論的にその人間を構築するしかないわけである。その人間の理想的な像は、不完全性を切望するには理性を呼応しなければならないと信じているが、自己の行為、また自己にまつわる関係のすべてに特大の完全性を確信している者である。

C4 修正と言語批判

ここでは少しの修正をし、そして、現代言語学について私見を述べる。

S1 累次の向きに関するミクロ的視認

累次の向きが行為の向きと完全に背くという論説は、原理的説明性を追求した結果にすぎない。胎性患縁体の跳梁はおろか、あらゆる患縁
体は狂気によって跳梁されうる。累次は通常、その後に行為の向きと完全に一致する向きに流動的に繋合される。

S2 言葉の力

現代言語学の祖は、スイスの言語学者Ferdinand=de=Saussure（1857-1913）であるといわれる。彼の記号論では、「言葉とは分断的な存在を創生するものである」という。構造主義哲学の脱近代としての彼の記号論から、私は永劫回帰の前段階として近代回帰を主張し、それは「言葉とは狂気の明晰化のもっとも有効な手法である」という教説を私が主張することである。つまり、近代回帰のドットは、直示されるものが存在であるというところにある。

さて、この前提で言語的な言葉を、ある枠線で二項に区切る。つまるところ、実存的（あるいは物質的）対象と概念的対象である。さあ、概念的対象を説明するために妄想について考えてみよう。ここ最近、私は毎晩のように、布団で横たわると同時に現実（そう感じている世界）から解脱し、容色うるわしき童顔の女性と旅をするのだ。そのような世界で私たちは海をみたり、砂浜に埋まったり、またどんな時も青い空を海岸から見渡し、はるか悠久の過去に地球が灼熱と地獄の世界だった時の大きく乾いたクレーターに、およそポセイダオンが限りなく降り注がせた雨に、水を溜めていたときのことを思い出すのだ。このような想像的視覚はなるほど不可思議であって、これらの本性を露呈させたいという欲動に駆られるのは仕方あるまい。別に視覚に限らず、結局知覚器官はすべて妄想手段である。味の想像、音の想像、香りの想像が困難なのはその知覚器官が現実的な刺激に触れている機会がその目的に対して少ないからである。畢竟、概念的対象はこの想像的知覚によって、実存的対象はこの現実的知覚によってシニフィエを生成するのである。これらに直示によって名前を冠することで言葉というもの、それが完成するのだ。

この前提を据えたところで、シニフィエの狂気性があきらかになったであろう。シニフィエとは狂気（マニケー）であり、これらを明晰にすることが言葉の役割である。思考の論理性が発揮できるのは、この明晰化されたマニケーは理性に歓迎されるからである。これは、彼のいう言語の恣意性は理性より発散せられたものであるがゆえに。

C5 おわりに

さて、好好爺の戯言はいかがであったか。私が本書で、少しでもなんらかの議論を生み出せたらこれに勝る喜びはない。

さいごに、例の人に祝辞を述べたい、彼なしに本書はあり得なかった。彼に深甚の謝意を表明する。